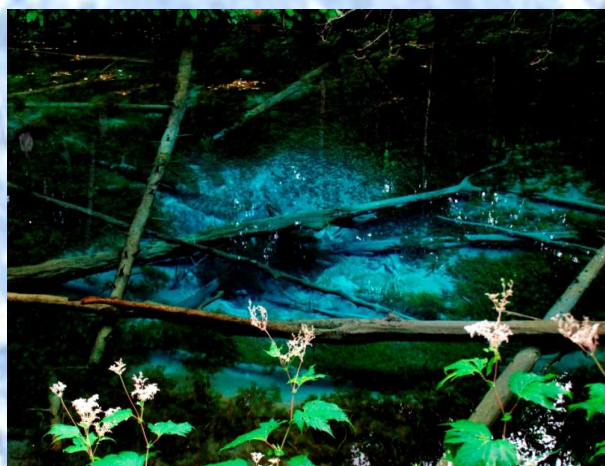


2011

北の大地

—「梅雨」の北海道—



2011 北の大地 雨・雨・雨…

2011 7.6~7.20

7月6日(水)

自宅(16:30)―山田IC―仙台南部・東部自動車道―仙台東IC―
仙台港フェリーターミナル (17:00)(19:40)〜太平洋フェリー「いしかり」〜 25km

昨年と同じく仕事を午前中で終わらせ、昼過ぎに家に帰り、ゆっくりと準備をして出発した。昨年までは仕事を早退するという後ろめたさが常に付きまとっていたが、この春に退職したことにより胸のつかえは何も無くなった。震災の影響で仙台港北ICが渋滞しているのの一つ手前の仙台東ICで下りた。港が近くなるにつれ震災の傷跡が4カ月近くたった今でも残っている。信号の柱が根基から倒れ、港付近は信号なしの状態、主要交差点だけ警察官が手信号で誘導している。

3月11日、22年度最後の授業を視聴覚教室で行い、生徒達から寄せ書きと花束を贈られ、余韻に浸りながらジブリの作品を上映していた。突然、下から突き上げるような揺れが始まった。すぐに収まるだろうと思っていたが、今まで経験したことのないような激しい揺れと轟音が建物を襲った。視聴覚教室は一瞬のうちに暗闇になった。電動カーテンは手動で開けようとしても開かないので、出口の扉を開けてカーテンを手繰り寄せ、廊下からの明かりを確保したが柱につかまっていなくて立っていられない。築6年の新校舎もバラバラに崩れ落ちると覚悟を決めた。しかし、



新造船「いしかり」

そんな極限の状態にもかかわらず、生徒達は机の下に潜って指示を待っていた。最初の揺れが収まったので、「出るぞ！ついて来い！」と上ずった声をあげると、1つしかない出口に殺到するわけでもなく、冷静に順々に出てきて、しかも校舎の外に出るとき、「上からの落下物が危険だからちょっと待っている！」と止めたが、安全を確認するまでパニックを起こさず待機していた。この一連の生徒達の行動には正直感心したし、私自身助けられた。その夜、生徒達と暗闇の中でローソクと懐中電灯の明かりのもと、飲まず食わずのまま一夜を明かしたが、仙台港石油コンビナートの火災が夜空を赤々と不気味に染め、明け方まで続いた。

あれから4カ月たってもこの状態だから、復興には計り知れない時間と労力が必要とされる。仙台港フェリーターミナルに着き、屋根が根こそぎ流されたバイク置き場にバイクを止めたが、驚くことに、岸壁のそばにあるフェリーターミナルは奇跡的にそのまま残って業務も行っている。ここで気仙沼の春日さんと落ち合うことになっているが、まだ見えていないようだ。春日さんは気仙沼で大きな水産加工会社を経営しているが、工場は全て津波により流され、自宅も玄関先まで水が押し寄せ、車庫は水浸しになりバイクも水に浸ったそうだ。震災後ようやく繋がった電話で被災見舞いの話をしながら北海道行きの話をしたら、「俺どこ連れていがないのが」と強い口調が返ってきた。自分の工場を再建したとしても、下水処理をはじめ魚の内臓などの処理工場が稼働しなければ仕事にならないから、家にいるよりバイクで旅に出たほうが良いと言うのだ。76歳の発想とは思えないが、勿論、行きましようということになった。そして、今回はもう一人、去年、北海道の大雪山で知り合った横浜の関水さんとアポイ岳の麓で落ち合うこと

になっている。私が乗船手続きをしていると、上下黒の皮ジャンに緑のバンダナの独特の雰囲気を出しながら春日さんが、「道が混んでいて、予定より時間がかかった」と言いながら現れた。気仙沼からは2時間半は優にかかったろうに。

今日の船は今年3月に竣工したばかりの新しい「いしかり」で、震災後しばらく運休していたこともあり、今日は満室の盛況だ。車無しで船旅を楽しもうとする人達が最近本当に多くなった。楽しいレストランでの食事はさぞかし混んでいるだろうと思って行ったが、以外と空いていた。レストランが広いのと、高いレストランの食事より、事前に食べ物を用意してデッキで食べる人達が多くなったためかもしれない。私はいつものように赤ワイン、春日さんは生ビールでお互い無事での再会を喜び乾杯し、ラストオーダーを告げられても酔うほどに話が弾み、最後の客になってしまった。宮城県北出身の若い女性の従業員が、居残る我々に嫌な顔するどころか、我々の話に乗ってきて相手をしてくれたのも遅くなった原因の一つになった。

7月7日(木)

～～苦小牧フェリーターミナル(11:00)ーD259ー日高自動車道ー富川ICーR235 一道の駅三石ーアポイ山麓ファミリーパークーR336ーL34ー襟裳岬ーL34ーR336ー晩成温泉ーセキレイ館 270km

トラックが下船した後、バイクの下船だったので出発が遅れた。いつものスタンドで給油をして、無料の日高自動車道を走り始めたが、ハンドルを取られたりするほど風が強いのでスピードは出せない。タンクローリーの後を我慢しながら走っていたがついに我慢できなくなり、右ウインカーを出して、ほんの僅か一瞬バイクを右に倒して追い越したが、春日さんもついてきた。富川を下りてからは太平洋沿岸を走ったが、磯の香り、潮の香り、昆布の香り、シシウドの華の香りと、視覚だけでなく嗅覚も楽しませてくれる道だ。静内の町の手前で、対向車がパッシングをしたので念のため速度を落して行くとねずみ取りをしていた。あのまま走ったら間違いなく捕まり、旅の初日から不愉快な思いをするところであった。

2時間近く走り続けたので、休憩を兼ねて昼食をとるため「道の駅三石」に止まった。ここは高級昆布の三石昆布の産地である。このあたり一帯の昆布はいわゆる日高昆布である。ここでの食事は、海藻をふんだんに使っているように見えるメニューの写真につられて海藻そばを頼んだら、今はやっていないと言われ出鼻をくじかれた気分になってしまった。ここで関水さんに電話をすると、ちょうどアポイ岳に登って下山したところで、約束の3時には会えることを確認した。様子を過ぎれば約束の地は近い。アポイ岳の大きな看板を左折して国道を離れ、今までの取り締まりのストレスから解放され、思いつきスロットルを絞り込みアポイ岳を右手に見な



がら、きれいに整備されたワインディングロードの白線をトレースするように駆けのぼった。アポイ山荘の駐車場に一目でそれとわかる荷物を満載したバイクが止まっていた。関水さんのバイクと確信し、その脇に止めたがまだ食事が終わっていないのか関水さんは見当たらない。

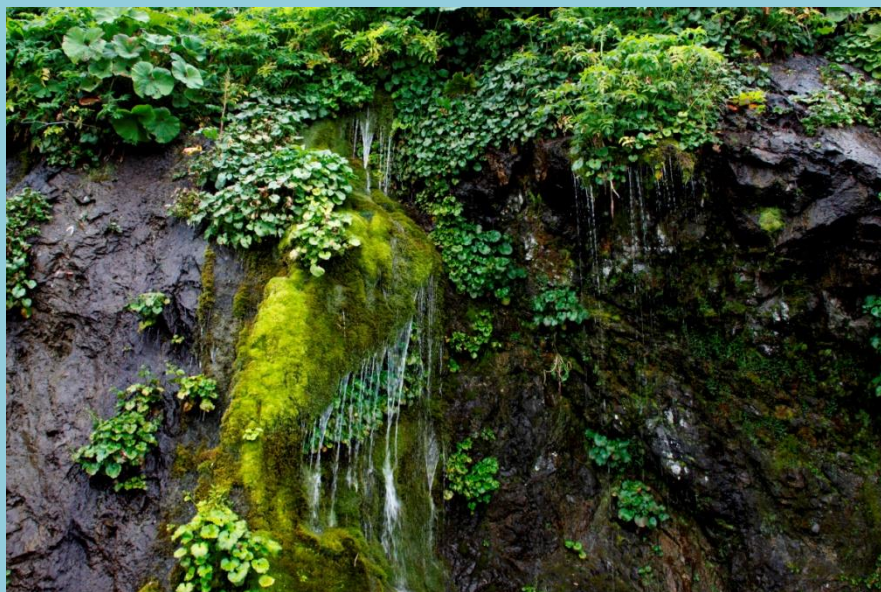
な



襟裳岬

2台のハーレーの音に気がつかないはずがないので待つことにしたら、関水さんが手をあげながら山荘から現れた。会うなり「かんらん岩」を見せたいと山荘の展示室に案内された。なるほど、緑がかかった変成岩が並んでおり、ここ固有の産出らしい。気の遠くなるほどの「時間」を感じさせる大地の作品のようだ。

3人が揃い、春日さんが襟裳岬に行ったことがないというので、いつのまにか風は収まったし、天気もまあまあなので、春日さんを挟むように私が先頭で襟裳岬を目指して走り始めた。襟裳岬にあと10kmぐらいのあたりからガスが出始めたと思ったら、みるみる濃くなり、何も見えない白い世界の走行となり、結構濡れてきたし寒くもなってきた。襟裳岬駐車場では岬まで歩くことを考えて一番奥に止めようと後続をミラーで確認しようとしたら、ミラーに倒れている春日さんが映った。何事かと駆けつけると立ちごけしたらしい。幸い怪我もなくバイクも大丈夫だったのでほっとした。濃霧の中でホワイトアウトのようになってきたところに、低速のためにバランスを崩したようだ。岬まで歩いたが、襟裳岬の歌ではないが、~~なにもない春~~じゃないけれど、なにも見えない何もない襟裳岬だった。日高山脈が直接太平洋に落ち込み沈んでいく景観は全く見えず、眼下に微かに渚の白波がうかがえた。百人浜の広大な渚も白い霧の中で、補助ランプを点灯して慎重に走った。黄金道路あたりでようやくガスが消え、少し暖かくなり路面も乾いてきた。黄金道路は数年ぶりに走るが、もはや、以前の面影は無くなった。波しぶきを浴びながら走った渚ギリギリの道路は、今や、とてつもなく長いトンネルに変わり、時間を稼ぐだけの、景色を楽しむことのできない機能優先の道になってしまった。長い幾つものトンネルに開放され、きれいな玉砂利の上に昆布を干している浜辺の、波打ち際の単調な道路を気持ちよく走っていたら、左手の崖の途中から水が溢れ出て滝となって流れていた。明らかに伏流水だ。私は伏流水が大好きなのでバイクを止め、カメラをサドルバックから引きずり出した。近くに案内板があったが、「フンベの滝」と命名され、やはり、日高山脈の地下水が海岸の崖から流れ出しているのだ。ここは何回か通っているのに今まで気がつかなかった。透き通った伏流水が流れている一帯は自生のクレソンが密生し、白い花を咲かせていた。止まったついでに、このフンベの滝を背景に走行写真を撮ることにした。



フンベの滝

フンベの滝を背景に走行



関水



春日



土門

フンベの滝からは関水さんが先頭を走った。先頭を走っていると、後続の様子を常にミラー越しに確認しながら前方のルート判断をしなければならないが、最後尾はついて行くだけだから疲れない。今日の宿は晩成温泉の近くの「セキレイ館」だが、何かロマンを秘めたような名前の歴舟川を渡り、晩成温泉の看板を見てからが長かった。到着予定時間が過ぎて少々あせり始めたころ、晩成温泉への右折看板が見えた。そして、いかにも農家だった雰囲気が残るセキレイ館はすぐ見つかったが、晩成温泉への送迎時間は過ぎていたので、そのままバイクで温泉に行くことにした。5分ほどで温泉に着き、急いで重ね着の服を脱ぎ、冷えた体をヨードチンキのような色をした湯に沈めた。関水さんは「海藻の堆積層を通して温泉が湧いているのでヨード成分が多いのだ」と言っている。さすが薬草研究家だ。関水さんは横浜の薬品会社の経営者であり、薬草研究家として執筆活動もしている。温泉に入りながら、ハマナスの花が咲いている砂浜の湿地帯越しに太平洋の白波が見えた。それにしても、大樹町にある晩成温泉とは出来過ぎている。ふろ上がり、従業員に晩成温泉の由来を聞いてみた。昔から晩成という地名はあったそうで、決して大器晩成にあやかっただけではないと言っていた。大器晩成、大樹晩成、やはり出来過ぎている。帰りは霧雨となっていた。湯あがりに、また雨具を着ては走りたくないが、5分間だけ我慢しようと乳白色の荒野をヘッドライトの明かりが切り裂いた。ガスの幻想的な明かりの中を、童話の世界のようにキタキツネが何も言わずに一瞬走り抜けた。

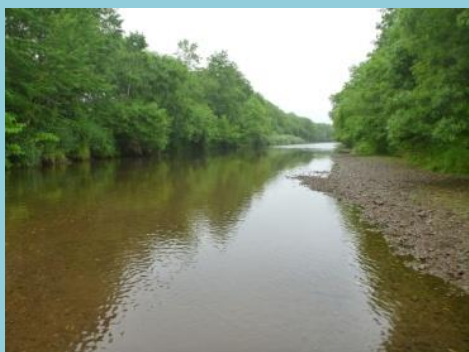
夕食は我々のほかに、大阪からの人とほとんど喋らない人と5人で、それぞれ北海道限定のクラシックの缶ビールで乾杯した。シカ肉の焼き肉にはキャベツがもっと欲しかったので追加をしたが、もう無いと断られた。やがて関水さんはビールが程良く回り、登山の疲れが出たのかイビキをかき始めた。横浜の関水さんは大洗からフェリーで2日前に北海道に入り、雌阿寒岳を登り、昨夜はアポイ岳キャンプ場に夜遅く到着した後にテントを張り、今朝早くからアポイ岳に登ってきたのである。そのための疲れが出たのであろうがすごい行動力だ。客が飲むビールをほとんど飲んでしまうビール好きのオーナーも加わり話がはずんだが、仕切ったのは春日さんで、ほとんど喋らない人が一言話した時、「あんた、しゃべれんだあ！」と真顔で言ったのには皆で沸いた。そろそろお開きにしようかというとき、関水さんが目を覚ました。話好きの人がこのまま寝るはずがないと思っていたが、英気を養った関水さんがここから調子をあげ、結局夜中の1時になって、オーナーから「もう寝ましょう」ということになり2階に上がった。

7月8日(金)

セキレイ館(9:30)－D881－R336－D319－忠類－R236－D622－カムイコタンPA
－D1002－L55－中札内道の駅(昼食)－R236－帯広－R241－R273
－糠平温泉－三国峠－層雲峡

リゾートペンション「山の上」

280km



朝食前、小雨降る中をオーナーに教えられた当縁川(トーベリ川)へ10分ほど走った。朝霧が濃く立ち込め、国道なのにほとんど車は通らない。当縁川の橋の上から川を覗いたが、ざら瀬の川でポイントは橋の下くらいしかない。砂利道の農道を草をかき分けるようにバイクで河原まで下りた。浅瀬を、手前のポイントから流すとすぐに釣れてきた

たがウグイだった。大物用の大きい鉤によく掛ったものだ。気を取り直して2投目を流すと今度はニジマスが釣れたが大物には程遠い唐揚げサイズなので、魚体に触らずに鉤だけを持って左右に振ると簡単に外れ、慌てたように泳ぎだした。自然の川なのに釣り堀のように釣れてくるが、大物がいる雰囲気ではないので下流に移



トーベリ川(左上)とニジマス

動したが、膝までもない水深が続き竿の出しようがない。かろうじて小さなえぐれがあったので、半信半疑で流したがやはりアタリは無い。釣れそうもない思いながら、もう一度流したら目印が不規則に動いた。まさかと思いながら合わせると、重い手ごたえが7.2mの竿を通して伝わってきたので、反射的に強く竿を立てようとしたらバキッと音を立てて折れた。折れた竿が引きずり込まれていくので、手元に残った竿を放り投げて危機一髪のところで折れた竿を掴み、竿を立てたら強烈に竿を絞りに込んでいく。しかし、竿を折ったにしては大きくない。25cmほどのきれいなニジマスが上がってきたが、どうやら竿にひびが入っていたために折れたようだ。スペアの竿はバイクに置いたまままだし朝食の時間にもなったので終わりにした。

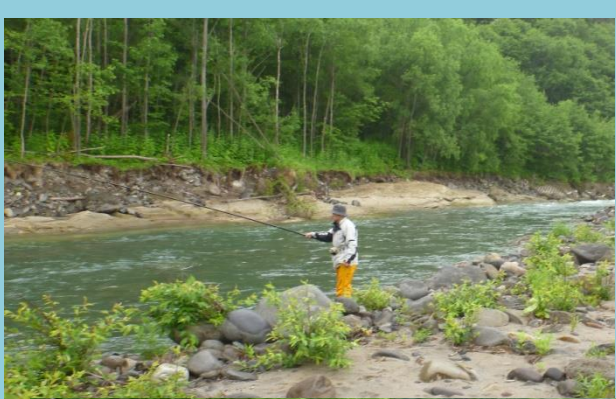


今日は最初から雨中走行だ。関水さんが「このあたりの湿原がきれいだから見に行こう」と言うので後に従った。雨模様でおまけにガスがかかり視界はあまり良くないので気に入った写真は望めないと思いながら走ったが、今日の目的地とは反対方向に向かってしばらく走るので、今日の最大の目的の大雪湖での釣りの時間が無くなることとか、春日さんのバイクの燃料切れの心配から、直線道路を利用して関水さんの前に出て止めて、「どこまで行くの？」と聞いたら「湧洞湖。木が大きくなって以前に来た時と違う。引き返そうか」と言うので、「春日さんの

燃料が心配だから戻ることにしよう」とガソリンスタンドを求めて走ることにした。こんな原野の中での燃料切れはこれからの行程に大きな影響を与える。20kmほど走ってようやくスタンドを見つけてほっとした。

歴舟川は水がきれいで雰囲気の良い川だが、カムイコタンPA付近では川が大きすぎて竿を出す気にはなれない。歴舟川もきれいだが、ここからひと山越えた中札内村を流れている札内川は清流日本一の川である。このあたり一帯は日高山脈を水源とする魅力的な川が多く流れ、十勝川に合流する。「道の駅なかさつない」で昼食をとりながら、層雲峡の「山の上」に今日の予約をいれた。宿の人から「何時到着の予定ですか」と聞かれたので、「今、中札内ですが、途中で釣りをしながら行くので遅くなるかもしれない」と答え、「こっちでも釣りできるよ。夕食が6時半だからそれまでは着ようしてください」と言われた。そして、大雪湖で釣る予定だと話したら、そこが今、北海道で一番いい場所だと丁寧にポイントまで教えてくれたが、地理的状況が良くわからないし、とにかく時間が無いので去年釣った場所に行こうと決めた。上士幌からは100kmほどスタンドが無くなるので3人とも満タンにして、予定より2時間遅れで出発した。

直線道路を走っているとき、ふとミラーを見ると関水さんが消えた。春日さんと二人で路肩にバイクを止めて待たが来ない。マシントラブルか本人の体調不良かと心配して少し戻ると、「いやあ、急に睡魔に襲われセンターラインのほうにひとりだに寄って行くようになったので、危ないと思い、コンビニでガムを買ったんだ」と笑いながら言っている。「もう大丈夫だが、また眠くなったら寝て行くので、かまわず行ってくれ」と言うので、十勝三俣の三俣山荘で止まることを約束して走り始めたが、どうやら睡魔は通り過ぎたようで山荘まで一緒に走った。時期的に開花が丁度良いと思ったルピナスの花は目を疑うほど貧相な有様を見せていた。カメラを出す気にもなれない。去年、おとしは見事なまでに群生しており、一面緑の原野にここだけ華やかなピンク、紫、赤、白が輝いていた。年によって花が少なくなっただけなのか、あるいは大自然からの警鐘なのか気になる。ここから道内最高所の三国峠まで、大雪山の原生林の樹海を切り開いた日本一のワインディングロードは何度走っても胸が高鳴る。



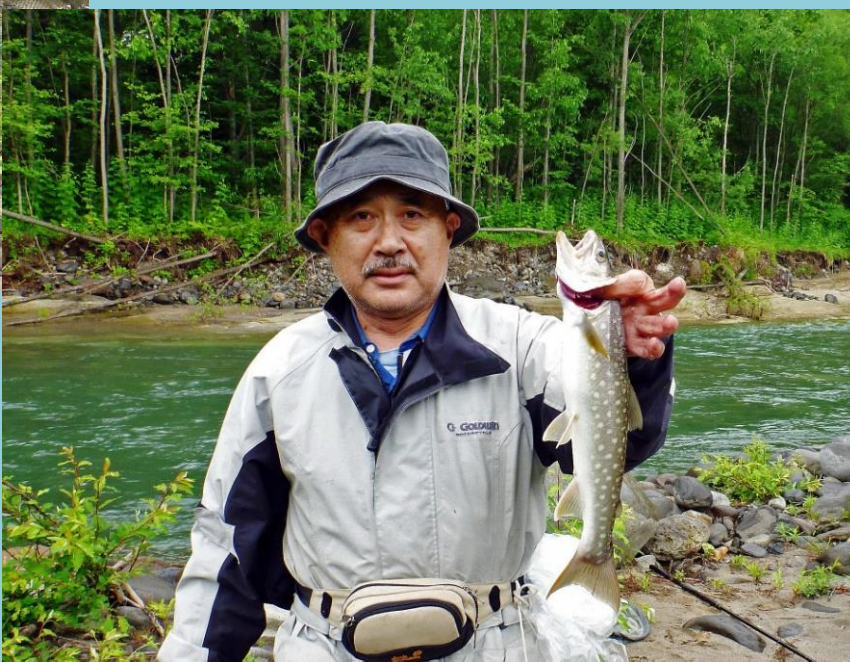
ところが、薄日が差すほどに天候が回復し、路面も乾いてきたのに、走り始めたとたんにも雨が降ってきた。走行写真を撮ろうと思っていた白樺の原生林の中の直線道路も一気に走り抜け、三国峠の休憩所にも目もくれず駆け抜け、一分一秒でも早く大雪湖の釣り場に着きたい一心でシフトダウンを繰り返しながら峠を下った。



一年ぶりに見る高原大橋からの景色はまるで変っていた。昨年、かなりの大洪水があったことを物語っている景観だった。しかし、川の水の色は、いかにも魚がいることを確信させる色をしていた。ウエダーを履く必要がないのでそのまま三人で川に下りた。昨年一人で川に下りた時は熊の恐怖に怯えたが、2度目ということもあり、3人いると熊の恐怖は全く忘れていた。こういう大場所での釣りは本来苦手なのだが、川の流れをよく見ると、流れの筋が幾つもある。複雑な流れの筋が無数にある場合は丹念に攻めていくしかない。何度目かの流しに、ついに目印が反応した。すかさず合わせ



るとまずまずの手ごたえが竿に伝わり、竿を絞り込んできた。雪代水に洗われた白いアメマスだった。今度はその少し上流で、今までにない重い引きが竿を満月に絞り込み、なかなか水面に顔を出そうとしない。ようやく魚をタモですくったが、40cm近い立派な魚体のアメマスだった。その後も、水面下の地形までわかるようになり、次々に良型が竿を絞り込んできた。赤い斑点が美しい、今まで見たこともない大きさのオシヨロコマも釣れてきた。関水さんの竿も大きくしなり良型を釣あげたようだ。念願の40cmオーバーはお目にかかれなかったが、十分楽しむことができたので1時間足らずで竿を収めた。しかし、欲というものは恐ろしいもので、糸鳴りをさせながら渾身の力でファイトする50cmを夢見るのだった。



大雪湖上流石狩川のアメマス



関水さんに念願の一匹

石狩川(大雪湖上流)





良型のアメマス



良型のオシロコマ



層雲峡の予約した宿「山の上」に到着すると、オーナーが「釣れたかい」と気さくな顔で話しかけてきた。そして、6時半になったにもかかわらず、「魚、油で揚げてあげるよ」と言ってくれたが、このサイズになると料理する前に下味をつけたりしないと大味でおいしくないし、食べ切れなくて粗末にしてしまうことになるのでお断りをし、冷凍にして送ることにした。ここで初めて、冷凍にする場合は、ワタを取らないでそのままのほうが味が落ちないことを教えてもらった。そう言われればほとんどの冷凍の魚はそのままだ。半年くらいのうちに食べるのであれば、腹を開かないほうがおいしいとのことだった。勿論、送った魚は自分で三枚におろし、日本海の飛鳥産トビウオのだし汁で下味を付け、ムニエルと油で揚げてあんかけにしておいしくいただいた。釣りは、天からの恵みと感謝しながら自分で料理をして、無駄なくおいしくいただき完結する。食事は後をお願いして温泉に入ることにした。隣接している公衆浴場の「黒岳の湯」は今日一日の雨天走行の疲れを癒し、釣りの満足感を増幅させるに十分な湯だった。そのあとのビールのおいしいことは言うまでもなく、今日一日の無事と釣りなどの思い出の話となり、二日続きの宴会となった。オーナーも加わり、層雲峡で生まれ育ったオーナーの話には説得力があり、バックボーンに層雲峡を愛し、大雪山の自然に対する畏敬の念と愛情が感じられる話を、おもしろいキャラクターを通して聞かせてくれた。

これみよがしの自然愛好家の人達の話とは次元が違う。宿の壁という壁にはオーナーの撮った写真が所せましと無造作に飾られていた。ここで生活をする人ならではの羨ましい限りの写真だが、あまりにも多すぎて価値が半減している。それぞれの写真の仕上がりは相当なものであるが、私の目に留まったのは、写真に書き添えられたオーナーの一文である。オーナーの人となりを感じられるので紹介しよう。



「大雪山麓に飛来するオオワシ」

ハンターの撃った鹿を食べることによる鉛中毒。風力発電施設(風車)への衝突死、大規模油田開発がすすむサハリンなどの生息環境の破壊が問題になっている。



「層雲峡のクマゲラの棲む森」

見上げるほどの大きなシナノキやマツの古木が立ち並ぶ、昔の人が代々守ってきたこの森に、砂防工事計画が上がっている。いつかこの森も、少なくとも姿・形が変わることになるのだろうか。



「トドマツの凍裂のあと」

厳冬期、 -20°C くらいになると、木の中の水分が凍り、堆積が膨張し、パーンという激しい音をたて、幹が裂ける。毎年きいた北国の音。ここ数年、聞かない。



「マルハナバチとエゾノツガザクラ」

もともと大雪山にいるハチは体が小さく、このような小さな花でも頭を中にいれて花の奥にある蜜を吸う。しかし、最近、大雪山でも目撃され、勢力が拡大しつつある外来種のセイヨウマルハナバチは体が大きい為、「盗蜜」を行う。

※「盗蜜」 花の横に大きな穴をあけるなどして、蜜を吸うこと。花粉の媒介を行わない。



「神々の遊ぶ庭 大雪山連峰」

大雪山は山麓の自然も豊かにつつま込む。そんな大雪山の大自然にも少しずつほころびが見え始めている。

この地で生きている人のメッセージである。

そして、昨年来からの疑問が解けた。コマクサの花の付け根に穴を開けた犯人はセイヨウマルハナバチだったのだ。

ここの息子が飄々としておもしろい。まだ若いが、父親の後を継いで層雲峡の良さを伝承しようとする姿勢が伺え、旅人を安心させる。いい加減飲んだ後に温泉に入りなおすことになり、のんびりと湯につかった。関水さんは長湯なので春日さんと先にあがり部屋に戻ったが、昨日の寝不足もあり横になった途端寝てしまった。



「山の上」オーナー(左)と息子(後)





熟年ライダー 左から関水 土門 春日

層雲峡 リゾートペンション「山の上」



7月9日(土)

層雲峡「山の上」(9:45)ーR39ー上川層雲峡I・Cー旭川紋別自動車道ー愛別/CーL140
ーとうまオアシスPーL37ーD1160ー中別ダムー天人峡ーD1160ーL68ーR452ーD580
ーL70ーD759ー富良野

ロッヂ・アイガー 169km

朝早く目が覚め散歩に出た。今日は雨が止んでいるので、宿の前の車進入禁止の道をロープウェイの駅まで歩いて行った。すでに6時の始発は発車し、次の観光客が並んでいた。足湯に入ろうと思ったらぼうふらが浮かんでおり休業中だった。今日は雨具を着ないで出発できそうだ。今まで層雲峡はY・Hに泊まるのが常だったが、この宿の良さに、明後日、大雪山縦走のために泊まる予約をし、今日が三人で走る最終日のスタートをきった。層雲峡ビジターセンターに登山情報を得るため寄ったが、センターの職員は明後日からの三日間は天候が悪く、そのあと好天が続くので日程的に余裕があるのであれば、登山を延期したほうが良いと言う。悪天候の登山はしたくないので、すぐに、「山の上」に宿泊変更の電話を入れた。久しぶりの雨具無しの走行となったので、層雲峡の岩峰を背景に走行写真を撮ったが交通量が多く少々危険だった。

大好きな「とうまオアシス」Pで一休みすることにした。春日さんと休んでいたが、関水さんがどこへ行ったのか姿が見えない。さてはと思い、休憩所に行ってみると、女性の従業員とお喋りが最高潮になっていた。関水さんは女

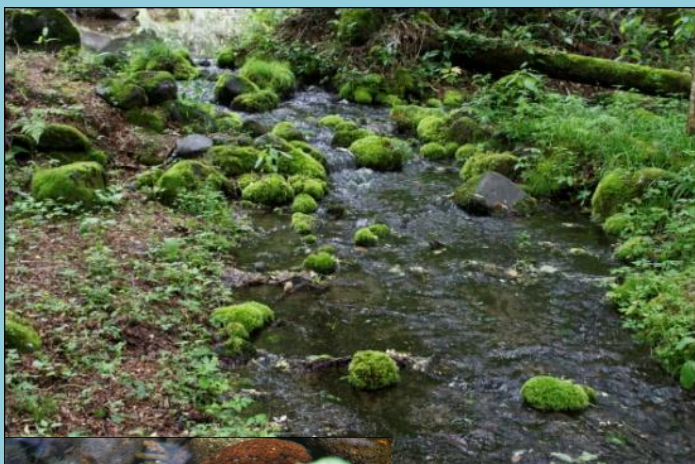
性に限らず、人を見るとなんの抵抗もなく極自然にコミュニケーションを持つとするが、これはすばらしい特技だと思う。



大雪旭岳源水

旭川郊外で3人一緒に旅は終り別れを告げ、関水さんと春日さんは右折し旭川方面へ、私は中別ダムの天人峡方面へと左折した。中別ダムへの流れ込みで大物狙いのためである。しかし、中別ダムへの流れ込みにかかる橋から見る忠別川は、まるで津波の痕跡のような荒れ方だった。去年の9月の北海道大洪水の爪痕だった。もう釣りは諦め、かねてから

気になっていた旭岳源水に行ってみた。バイクを置いてしばらく歩くと、こんこんと湧き出る湧水の出口が原生林の中にあり、そこからの小川にはオショロコマも泳いでおり、川の誕生を思わせるきれいな流れだった。女性カメラマンが三脚を構え、重そうなカメラ道具をわきにおいて撮影していた。天人峡温泉にも行って見たが、この宿には泊まりたくないと思うほど、崖にへばりつくような環境だった。

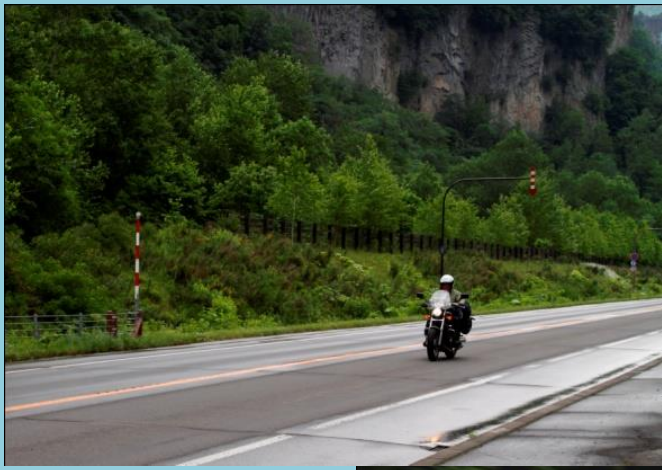


オショロコマ

富良野に予定より早く着いたので、いつもの布部川の所で餌用のバツタを捕り、駅前の釣り具やでドバミミズを買い、明日以降の富良野での釣りに備え、アイガーには早めに到着した。いつものながら、ここに着くと我が家へ帰ったような気持ちになり、自分の部屋のようにいつもの部屋に寛いだ。そ

して、スキー合宿をはじめ、公私ともに大変お世話になり、今年1月にお亡くなりになったご主人にお線香をあげ、ご冥福をお祈りした。もう、20年近くになり、合宿中は生徒をわが子のように厳しくしつけていただいた。今日の客は4人だが、夕食は私一人で、いつものように食べきれないようなボリュームだ。縦走は13日から16日までとし、12日に層雲峡の「山の上」に入ることにした。それまでは富良野で釣りをしながら待機

をすることにした。



層雲峡 R39

関水



春日





土門

大雪旭岳源水からの流れ出しの小川





大雪旭岳源水からの流れ



7月10日(日)

アイガー(5:30)ーR38ー西タップ川ー布部川ー富良野

ロッヂアイガー

114km

今朝は霧雨程度だが、昨夜来の雨がどのくらい降ったかわからないまま、朝食前に勇んで釣りに出かけた。しかし、予想以上に降ったらしく、どの川も濁流で釣りどころではない。早々に引き揚げ、午後からの減水を期待するしかなかった。お昼はカレー専門の「ふらのや」で食べようと思ったところ、すでに店の外まで並んでいたが、急ぐわけでもないし待つことにした。「唯我独尊」のカレーもおいしいが「ふらのや」は種類が多くおいしい。特にスープカレーがおいしい。1時間ほど待たされたがそれが苦にならないほどの旨さだ。

午後一休みしてから本流の状態を見たがまだまだ水量が多く釣りにはならないので、支流の布部川に行った。赤茶色の濁流で普通は釣りにならないのだが、バイクで走り回っているだけでもつまらないので、わずかのポイントを探して竿をだしてみたが、釣れそうな気配はまったくないのでやめて、西達布川に行ってみた。川沿いのブッシュにはハッキリとした釣り道ができています。釣れることは釣れるが唐揚げサイズばかりで、大物が釣れた数年前の面影は全く無くなっている。

ロッヂ・アイガーの佐藤さんと夕食を食べながらお話をしていたら、「北時計」が店を閉めたとのことで、所有者の倉本聡は「北時計」を富良野市に寄贈し、市が運営するらしい。「北時計」の今野さんに会えないのは残念である。また、我々がよく利用していたロッヂ・アイガーの近くの「富寿司」も店を閉めたそうだ。結構客が多くおいしい店だったのに寂しい限りだ。それだけ観光客が激減している証拠らしい。原発の影響で外国からの観光客は特に激減しているらしい。

7月11日(月)

アイガー(7:30)ーR38ーD759ーL70ーD580ーR452ーL68ーL37ーとうまオアシスーL140ー愛別ICー旭川紋別自動車道ー上川層雲峡ICーR39ー大雪湖・大雪高原大橋ーR39ー上川層雲峡ICー旭川紋別自動車道ー愛別ICーL140ーとうまオアシスーL37ーR237ー富良野

ロッヂ・アイガー

370km



美瑛の丘の裏道

富良野周辺の川は今日も期待できないので、比較的早く減水する源流部の大雪湖上流に行くことにした。7時半にアイガーの佐藤さんにおにぎりを作っていただき出発したが、丁度通学時間帯で、変わった光景を見た。小学校低学年の子供が子供用自転車に乗って通学する姿が多く見受けられた。JR富良野線の踏切で電車が通るのを待っていたら、反対側に、明らかに小さな子供自転車で1年生と思われる男の子が、ランドセルを背負ってヘルメットを被り止まっている。このあたりでは小学生の遠距離自転車通学は当たり前のように、仙台あたりでは見受けられない光景だが、危険も付きまとうだろうしかわいそうな気がする。しかし、送り迎えを親が自家用車で行っているのと比べると逞しく育つだろうとも思った。

美瑛の丘で有名な国道は避け、一山越えた西側の山道を走ったが、美瑛の丘の表通りと比べると、交通量はほとんど皆無で信号もないし、丘のある景色も自然のままで見劣りがしない。旭川空港を通り過ぎるといつも寄る「とうまオアシス」は近い。このルートを通る時は必ずというくらいここで休むし、休みたくなる不思議な所だ。毎年ここには車中泊の旅人が必ずいる。今年も軽自動車に荷物を満載した神戸ナンバーの車がいた。名古屋ナンバーのキャンピングカーも止まっていた。この車は駐車場のわずかな傾斜を補正するために、助手席側のタイヤにそれぞれ板をかましている。ここはトイレもきれいだし、水も自由に使えるし、自販機もある。ある程度の車の出入りがあるから治安上の心配もない。そして、屋根付きのテーブルがあり、旅人同士の情報交換の場にもなっていた。

大雪湖に着いたのは10時だった。一番釣りにくい時間帯での釣りとなった。さすがにこのあたりまでくると川の水量も申し分ない。しかし、「山の上」のオーナーに聞いた石狩川が大雪湖に流れ込む流れ込みへのルートはわからない。近くに「熊出没多発地帯・注意」の看板が目に入る関係上、森をかき分けて探すのも躊躇するので、この間釣った橋の下のポイントに行った。初めてここで釣りをしたときは熊の恐怖で釣りに集中できなかったのに、慣れるとほとんど恐怖を感じない。

このように川幅があり、漠然としたポイントの多い大場所は苦手なのだが、流れをよく見ると複雑な流れの中に幾筋の流れの道があり、流れの強弱がある。強い流れに挟まれるように緩い流れの筋があり、その上流、下流には底石がだいたいある。魚の餌となるものはその緩い流れに集まることを魚は知っているから、そこで待っている。そのように読んで仕掛けを流すのだが、ピクリともしない。こうなると竿の重さが腕に重くのしかかり、集中力も続かなくなり目印を見る目も散漫になってくる。やはりこの時間帯では無理かなと思い給水タイムとし、休憩しながら川の流れを見ていると催眠術をかけられたように睡魔が襲ってくる。それでも、休憩で頭をリフレッシュし、気を取り直し釣りを再開した。川を中心部を何度か流した時、久々にピンクの目印が不規則な動きを見せた。一瞬、頭に電気が走り、心臓の鼓動の高まりを感じた。期待を込めて合わせると、何度経験しても飽きることのない感触が7.2mの本流竿を通じて伝わってきた。ズッスリとした重さを感じたと思ったら潜水艦のように強い力で潜り始めた。アメマス独特の引きで、なかなか水面に顔を出そうとしないが、ようやく現わした姿は鯉と見間違えような黒色の濃いアメマスで、大きな口を開けている。こうなれば魚は抵抗の力を失いタモ網ですくうことができる。大雪山の雪代水で育った逞しくも美しく勇壮な顔つきのアメマスだった。

陽が照り始め、暑くなり、お腹が空いてきたので木陰を選んでお昼にすることにした。石狩川の豊かな流れの対岸はまだ新緑の名残りのする森が広がり、そんな中でのおにぎりはことのほかおいしい。時折、すこし離れた国道の高原大橋を渡る車の音がするが、普通だと雑音に聞こえて邪魔なのだが、ここでの音はなぜか安心感をもって聞くことができるのも熊の存在の為だ。鮮度を保つために冷たい雪解け水に魚を浸して置いていたが、いつのまにかカラスが突っこうとしている。石を投げたら逃げたが、すぐ近くで隙を覗いている。4, 5発執拗にコントロールよく石を投げつけたらさすがのカラスも退散した。

食後、ポイントを上流に変えようと河原を歩き始めたが、いかにも大物が潜んでいそうな上流のポイントへ行くには渡渉しなければならない。しかし、遠くから見たときはわからなかったが、近くで見ると意外に水深があり流れも速い。もし渡渉途中で流された時の状況を想像するとかなり危険だ。釣りに命をかけたくはないので上流に行くことは諦め、元の場所に戻ろうと、昨年秋の大洪水で運ばれた深い砂利の上を、仕掛けを付けたままの竿を持って歩いている時、肩斜面の河原に足を滑らし前方に転んだ。しかし、両腕で支えたのでダメージはほとんどなかったが、足元に仕掛けが落ちている。今の衝撃で穂先が折れてしまったのだ。この前折った竿の穂先と交換すれば簡単なのだがここには無いのでそれもできない。釣りを止めるにはまだ早いので、工夫をして修理することに決め、腰を下ろして作業に取り掛かった。こういう状況での工夫は楽しいし、我ながら良くできたと感心することが多い。穂先から2cmのところまで折れているのだが、折れているところから1cmほど重ねてコンマ6号のハリスで丁寧に巻く試みをすることにした。しかし、直径が1mmにも満たない穂先なので強く巻こうとすると折れてしまう。そこで穂先の持ち方に工夫と細心の注意を払いながらきつく丁寧に巻いたら、どうやら抜け落ちることはないようだ。こういうときにアロ

ンアルファーのような接着剤があれば完璧なのだが。この修理した竿でそのあとも良型を数本あげることができたし、朱点が妖艶な大きなオショロコマまで釣ることができた。餌の保存用の小さいクーラーには、大きなアメマスが窮屈に折り曲げられ一杯になった。帰る途中、いつも釣る層雲峡のポイントに差し掛かると、ただ通り過ぎることはできず、竿を出したら、ここでも良型のニジマスが何度かジャンプしながらファイトを見せてくれた。層雲峡のコンビニで氷を補充し、来た道を急いだ。人家のほとんど無い原野のアップダウンが続くワインディングロードを、Vツインの心地よい排気音を楽しみながら飛ばした。キタキツネが不意に飛び出してきたがエゾシカでなくてよかった。富良野への最後の峠が近付くと、峠越しに富良野西岳の尖がった特異な山頂が見え始め、だんだんと大きくなってきた。峠からは夕暮れに霞む富良野の街がひろがり、その彼方に芦別岳、十勝岳のシルエットが続いた。我が家に帰る感覚でアイガーに着き、ひと風呂浴び、富良野ワインを飲みながら佐藤さん手作りのおいしい夕食をいただいた。



石狩川源流のアメマス

7月12日(火)

アイガー—富良野駅—JR富良野線—旭川—バス—R39—上川駅—層雲峡

山の上

0km

いよいよ明日から大雪山縦走なので、今日のうちに層雲峡まで入る予定だが、登山口と下山口が違うのでバイクはアイガーに置いていかなければならない。午前中は登山の準備をして11時過ぎタクシーで富良野駅に向かった。タクシーの運転手は観光客が少なく暇だとぼやいていた。高速無料化実験期間中はレンタカーの観光客が多



かったが事故も多く、タクシーはそのトバッチリを受けたと言っていたので、どういことかと聞いてみたら、事故修理中は営業できなかったということらしい。その分も加害者に請求するみたいなので、タクシーにぶつけるのは注意しなければならない。街中をこの時間に女子高校生が歩いている。駅も高校生が多い。どうやら試験中のような。車内には中国人の旅行者が目立つ。層雲峡行きのバス発車までは時間があるので、旭川駅のレストランで軽くビールを飲みながらランチを食べた。旭川駅は新しくなっていた。待合室はかなり広くテーブルとイスまで設置してあるのでゆっくりと休める。外は北海道とは思えないくらいの暑さなので、バス発車ギリギリまで待つことにした。層雲峡行きのバスは昨

年の旭岳温泉行きのバスと比較にならないほどのオンボロバスで、発車するたびにドアのビビリ音がうるさい。途中から地元の年配者の客が多くなってきたので、重いザックを抱えて席を譲ったが、身動きとれず辛い。上川駅でトイレ休憩をした。上川駅前を下りてみたが、44年前に石北峠を自転車でも越えた時に、駅前で休んだ記憶があるが、その当時の駅前は木材の集積場があり、その近くに店が数軒あるだけだった。今の駅前には当時の面影を残すものは何一つない。

「山の上」に到着後すぐに温泉に入り、ふろ上がりのビールを宿の前のテラスで、夕日に輝く層雲峡の岩峰を眺めながら飲んだ。層雲峡の山々は晴れ渡り、風もなく静かな夕暮れである。しかし、天気予報は明日は雨。夕食は一人。宿泊客はいるのだが外で食べるようだ。オーナーと語りながらの夕食となった。テレビがあまりにも古く色が不自然なので、買い替えないのかと聞いたところ、オーナーの電化への抵抗の強さと電力会社の傲慢さへの反旗が翻ってきた。また、福島原発の問題にたいしての脱原発の考えの根底には、層雲峡の自然を守り抜こうとする決意があつての発言だった。外はかなり強い雨脚の音がしている。



車窓より 美馬牛付近



層雲峡温泉街



7月13日(水)

山の上ーばすーR39ー旭川駅ーJR富良野線ーのろっこ号ーラベンダー畑駅
ーR237ー富良野

ロッヂ・アイガー

0km

夜半に激しい雨で目が覚めた。縦走するかしないか、日帰り登山にするか、それともすぐ帰るか、頭の中をいろいろと駆け巡った。明日、明後日も天気予報は良くない。層雲峡6時20分始発のバスで帰ることに決めてバスターミナルに行くと、若い男女が軒下でお湯を沸かしていた。鎌倉から公共交通機関を使って、野宿しながらの旅が続いているらしい。昨日は黒岳下山後、最終バスが行ってから軒下に TENT を張ったらしい。今までの旅のこととかいろいろ話してくれ、別れ際名刺をもらったが、旅するライター・カメラマン・冒険家・ストリートキャンパー・広報スペシャリストと書いてあった。バスの発車直後、扉が閉まりかけたときに話しかけてきたが、運転手は非情にも扉を閉めて走り出した。何か言いたげだったのでもらった名刺の携帯に電話をしたら圏外で通じなかった。上川駅で休憩中に電話がかかってきたので出ると彼だった。もっと話したいと思っていたことと、今日の宿はどこかと聞いてきた。自分たちも富良野で野宿すると言い、宿にもし行けたら行くと言っていたが、結局来なかった。後でホームページを見てみたが、羨ましい限りの生き方をしている。こんな若者を見るとうれしくなり、もう一度会いたくなった。

旭川駅に着いて、観光電車「のろっこ号」を待つ間、例の待合室で待っていると、自転車で待合室まで乗ってきた人がいる。ヘルメットを脱ぐと中年の女性だった。慣れた手つきで手際よく自転車を解体してバッグに入れ改札に消えていった。いろいろな旅の形があるものだ。「のろっこ号」はレトロな車両だった。車内中に響き渡っている声は日本語ではない。日本人のような顔はしているが中国人だ。車両を貸切にしているように大きな声で話すし、通路まで占領してゲームをしている。話をしないのは日本人だけ。カメラは申し合わせたようにキャノンの5Dに赤リングの高級Lレンズが多い。それで旅行のスナップを撮り合っている。今夏は原発の影響で中国人の観光客がほとんどいなくなったと報じられているのが嘘みたいに車両中が中国人だ。。時間に余裕があるので季節限定の臨時駅ラベンダー畑駅に降りたら、なんのことはない富田ファームだった。すごいに賑わいだが、ここも中国人が大半だ。中国人の若い女性がシャッターを押してと頼んできた。使い慣れたキャノン50Dだったのでポートレイトにセットして何枚も取りだしたら、シャッター音につられたようにポーズをとり始めた。モデルがもう少し魅力的だったら撮影意欲も湧いたのだが数枚でやめた。層雲峡の雨が嘘のように晴れ渡り、北海道ではないような暑さとなったので、冷たいメロンを食べたが、まだ食べ頃前でかたくおいしくなかった。帰りは、旭川からの帰り道の佐藤さんの車に拾ってもらった。夕食後、「雛」に遊びに行った。ママの友紀さんはまだ見えてなく、ジュンがいたが、半年の間に大人の魅力が増していた。そのうち友紀さんが見えたが疲れているような感じだった。国分農園の国分さんが見えた時、去年も会っているのにすぐにわからず失礼をしてしまった。友紀さんは日中、国分さんの農園で仕事をしていると言っ

ていたが、疲れているように見えたのはそのせいかもしれない。天気予報は明日も雨なので、メロンの作業の手伝いと友紀さんの陣中見舞いに行く約束をした。



のろっこ号





ラベンダー畑





富田ファーム





7月14日(木)

アイガー—D985—山部(国分農園)—D985—アイガー

ロッヂ・アイガー

31km

朝から豪雨。小降りになるのを待って国分農園に行くことにしたが、ヘルメットのシールドが水滴で見えにくく走行が危ないのでシールドをギリギリまで上げて慎重に走った。雨水が道路を川のように流れ、小川は反乱しそうになっている。国分農園はすぐわかった。ハウスの中ではメロンの芽掻き作業中だったのですぐに手伝うことにした。実家でもプリンスメロンを栽培している時に手伝ったことがあるが、数十年ぶりの作業である。ハウスの中は立派な富良野メロンがゴロゴロしていた。一つのハウスは長さが50mぐらいで約10棟ある。余計な蔓を取らないと商品価値の高いメロンにならないので、一株ごとに丁寧に取ってやらなければならない。腰を下ろして余分な蔓を取るのだが、メロンの葉はかぼちゃの葉のようにトゲトゲがあり、長袖での作業となり蒸し暑く手間がかかる。今日は雨が降っているからハウスの中はそれほど暑くないが、それでも酸欠状態になり外に出て深呼吸を何回もした。由紀さんは慣れたもので、店にいるときは違う顔で黙々と仕事をしている。農産物は何でもそうだが、手間を惜しんだら良いものは期待できない。実家の93歳のおやじは今でもバカの一つ覚えでプリンスメロンを作っており、それなりに需要があり出荷していることを思いながら、手伝うことができないことをすまないと思った。昼食を挟んで3時の休憩まで作業をしたが、少なからず貢献したと思う。そして、休憩時には富良野メロンをこれでもかというくらいご馳走になったが、食べ方が贅沢だ。メロンの本当においしい赤身の濃い部分だけを食べ、半分くらいは捨てるようなものだ。皮の緑色の所まで食べる我が家の孫の顔が思い浮かんだ。

夕食時、アイガーの佐藤さんの生い立ちと苦労話を伺った。アイガーには十何年間お世話になっているが、こういう話をする機会はなかった。初めて聞いたが、小学低学年のころから家計のためにお金を得る仕事をし、布部、山部の石綿鉱山で石綿にまみれて仕事をしたり遊んだりしたこと、田植えなどの農作業、伐採した木の皮剥き作業のこととか、相当苦労しながら仕事をしてきた話を聞いた。



国分農園のメロンハウス



富良野メロン
うまいのなんのって！



こんな食べ方していいのかな？





「雑」の友紀さん

ハウスの中の作業



珍しいオツパイメロン



富良野メロン





国分農園主



我々が取った蔓



7月15日(金)

ロッヂ・アイガーR38-D759-L70-D580-R452L68-L37-L140-愛別IC
-旭川紋別自動車道-丸瀬布IC-R333-R242-R333-L103-R238
-浜佐呂間

さろまにあん

379km



今にも降りそうだが、まだ降っていない。5泊したアイガーに分かれを告げ、大好きなR237裏街道を走ったが、前日の大雨の影響は予想以上で、土砂崩れ、冠水した後に残った泥の除去作業があちこちで行われている。河川はまだ濁流のままで、道内全般に降ったみたいなので、どこへ行っても釣りは無理のようだ。

予定どおり大雪山の縦走をしていたら大変なことになっていた。当麻SAには12時到着。相変わらず旅をしている車が止まっていて、車内で寛いでいたり、車の掃除などをしている光景はいつ来ても変わらない。お昼は上川を過ぎた所においしい蕎麦屋があるので急いだ。蕎麦党ライダーズののぼり旗がある日比谷

英(はなぶさ)には数名の客が入っていた。そばとろ(大和いもの付け汁)を食べたが、相変わらず腰が強くおいしい蕎麦だ。バイカーが書くノートがあったので見てみたら、一昨日茨城の人がFLSTC で来ていたので、私も書いた。

上川ICから紋別自動車道の終点丸瀬布まで走ったが、オホーツク側は大雨の影響はなく、川の水は澄んでいるのではという期待は、湧別川の流れを見た途端にはかなくも消えた。「山の上」のオーナーに教えてもらった、スーパーヤマメが釣れるという野上橋はどこかと探したがなかなか見つからない。国道を行ったり来たりしてようやく探したが、国道から少し入るのでわかりづらい。苦勞して探したがこども釣りのできる状態ではなかった。

「さろまにあん」に行く前にサロマ湖ワッカ原生花園に行ってみた。車両は進入禁止なので自転車を借りようとレンタサイクルのおじさんに、今年の花の状況を聞いたら「スカシユリはそろそろ終わりで、背の低い花が多くなっているの、自転車だと見逃してしまうから歩きのほうが見られるよ」と教えてくれた。なんとも商売っ気のない人だ。親切なアドバイスに従いオホーツクの波打ち際まで歩くことにした。バイクのスピード感と比べると、あまりにもスローで地上の細かい花々なども目に入り新鮮に映る。スカシユリも思った以上にあり、ナデシコジャパンで有名になったカワラナデシコの上品なピンク色やハマフーロの可憐なピンクや派手な紫の花などが見られた。1時間弱でオホーツク海の砂浜に出た。少し重い色の海は夏の花とは思えない静寂と寂寥感が漂っていた。オホーツクの花に来るといつもそうなのだが、見渡す限り船は見当たらないのに船のエンジン音が遥かかなたから響いてくる不思議な現象に見合われる。誰が作ったのか、流木を組み立ててオブジェ作品を砂浜に作っていたが、以外と波打ち際を背景に存在感があった。遊び心のある人が作ったに違いない。二、三本付け足そうと思ったが、付け足すことを拒否しているような隙のない造形だったのでやめた。「船長の家」の市場で今が旬のホッカイシマエビを家に送ったが、今年是不漁のため高いと言っていたが、大ぶりのを2パック送った。

「さろまにあん」に到着後オーナーが近くのホテルの温泉に連れて行ってってくれた。ホテル名が「鶴雅」なのに中に入っているレストランの名前がラメール、マウイ、イストルールというのもそのギャップがおもしろい。一組の客は外食だったので、夕食はオーナー夫妻と3人で食べたが、期待していたホッカイシマエビは生の刺身ではなくポイルシ

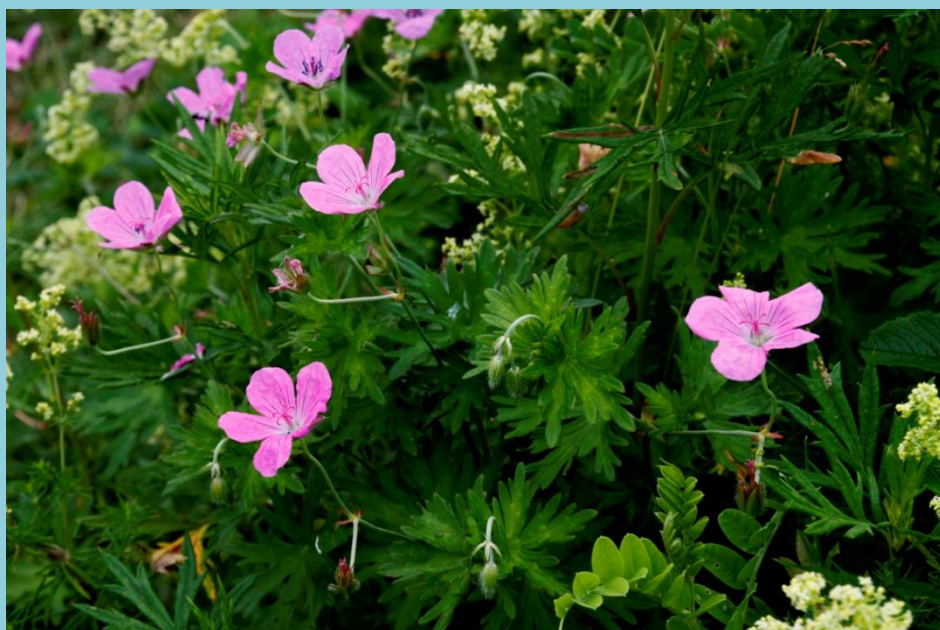
たものだったのが残念だったが、ここの食事はいつもおいしい。オーナーも今年のホッカイシマエビは高いと言っていた。近くの白帆で外食した老夫婦が戻ってきたが、おいしいけど食べ切れなかったと言っていた。

この夫婦は100名山を目標にしているみたいで、斜里岳と雌阿寒岳に登ってきたと言っていた。ご主人が奥さんを連れて登っているのかと思い、「奥さんも一緒に登るのも大変でしょう」と話したら、ご主人が「女房のほうが先に山をやっていて、私は後でついて行くようになんたんで、女房のほうが先輩なんです」と言っていたが、どうみても奥さんの体型は山をしている人の体型ではない。オーナーには仙台の知人がいて、震災の後、若林区と岩沼の知人のところで1カ月間のボランティア活動をしてきたそうで恐れ入る。私以上に震災の惨状を目の当たりにしているし、身近に受け止めている。



カワラナデシコ

ワッカ原生花園の花々





オホーツク海





7月16日(土)

さろまにあん—R238—網走—R244—斜里—R334—ウトロー—L93知床五湖—岩尾別温泉
—うとろ—R334—斜里—R334—清里—D1115—さくらの滝—D1115—神の子池—D1115
—D944—小清水—R391—浜小清水—R244—網走—R238—浜佐呂間 さろまにあん 329km



小清水原生花園展望台より知床連山

今日は久しぶりに天気がよさそうなので、知床五湖に行くことにした。その前に、今日の夕食は久しぶりに白帆で食べようと店に予約をしたら、おばさんが外の掃除をしていた。予約の話をする、「ごめんなさい。今日は町のお祭りでピヤガーデンの手伝いに行かなければならないの」ということになった。「さろまにあん」に夕食を頼み、能取湖、網走湖を横目に網走の街を抜けると海岸道路となり、潮の香りを胸一杯吸いながらさわやかな潮風の中を走り抜けた。右手には濤沸湖の彼方に斜里岳、左手は小清水原生

花園が続き、知床連山も頂上付近は雲に覆われているが、比較的クリアーに見える。バイクを駐車場に止め、砂丘に登るとスカシユリとエゾキスゲが花盛りでエゾフウロも可憐な花を敷き詰めていた。



え



小清水原生花園



世界遺産登録後、急激に変貌を遂げたウトロの街は通り抜け、知床五湖を目指した。学生時代2週間お世話になった網元の家は今は無く、道路も含め景色が変わっている。ウトロ漁港にあるオロンコ岩だけは昔と変わらないままだ。知床横断道から左折して知床五湖への道に入ると急に原始的な雰囲気になり、道路沿いでエゾシカが平気で草を食べている。岩尾別川を渡るとさらに一段と秘境の雰囲気になり、エゾシカだけではなくヒグマも出てきても不思議ではなくなってきた。車と違いバイクは剥き身だから遭遇した時のことを考えると緊張する。

途中の道路は車が少なかったが知床五湖の駐車場は以外と車が多かった。この時期は熊の活動期で危険なため、自由探勝は一湖までしか行けない。レンジャーとの5湖までのツアーは所要時間3時間で一人八〇〇〇円だった。ツアーに一人空きがあったがツアー出発時間の関係もあり、1湖までの自由散策に行くことにした。1湖までは高架木道が完成しており、両側には高圧線を通してヒグマ対策を完璧にしている。ヒグマは確かに怖いがここまですると秘境知床五湖も色あせてしまう。残念ながら羅臼岳の頂上は見えなかったが、条件に恵まれ、湖面に山の影を写したら最高の景色が見られると思った。硫黄山までの山並みが見えるが、羅臼岳から硫黄山までの縦走はすばらしい景観が約束されるだろうが、熊との遭遇に怯えなければならぬだろう。木道上は虫が多く、防虫剤をぬってもほとんど効果がない。熊が寄ってこない高架木道付近では鹿が安心してのんびり草を食べている。

羅臼岳に登った時に泊まった岩尾別温泉への細い道をおっかなびっくり行ってみたが、当時の面影を残すものはほとんどなかった。岩尾別川のいたるところに看板が立っている。「この一帯に生息する生き物の餌の確保のために釣りは自粛してください」と書いてあった。食物連鎖の関係の複雑さを考えさせられたが、こんなところで釣りをする気にはなれない。道路沿いにあまりにも鹿が多いのでバイクから下り、カメラを持って近付くと、ある一定の距離になると静かに離れて行ったが、もはや家畜のように思えてならない。バイクの前をキツネが歩いているのでバイクを止めて、カメラを向けても逃げない。胡散臭そうな顔をしながらこちらの様子をうかがっている。どうやら、食べ物を期待しているようだ。観光客が餌をやるからこんなキツネが現れてしまう。人間の身勝手な動物愛護の犠牲になり、やがて野生の力をなくして死んでしまう。



離になると静かに離れて行ったが、もはや家畜のように思えてならない。バイクの前をキツネが歩いているのでバイクを止めて、カメラを向けても逃げない。胡散臭そうな顔をしながらこちらの様子をうかがっている。どうやら、食べ物を期待しているようだ。観光客が餌をやるからこんなキツネが現れてしまう。人間の身勝手な動物愛護の犠牲になり、やがて野生の力をなくして死んでしまう。



知床五湖の一湖



知床五湖一湖の水面





エゾシカ



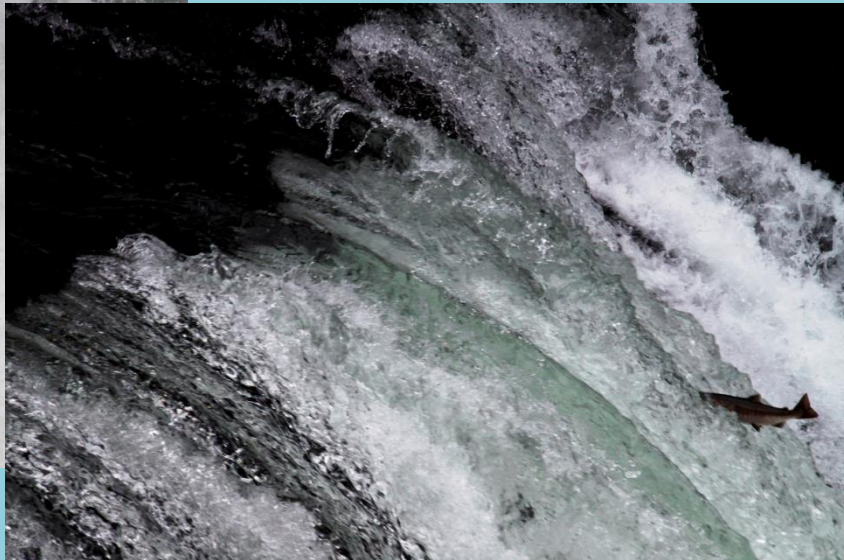


キタキツネ





オシンコシンの滝



「さくらの滝」のサクラマス

斜里から清里への道は何度も通ったことのある懐かしい感のする道だ。「さくらの滝」は容易に見つかった。滝の入口には熊出没注意の看板が立っている。木立の中に入るとすぐに滝があり、カメラマンが三脚にカメラを構えていた。一見してプロと思われるカメラマンからアマチュアまで 5 人ほどいた。滝の落差は 2m 弱だが水量は大雨の後ということもありかなり多い。赤身を帯びたサクラマスが滝つぼの白泡から突然飛び上がってきた。しかし、滝の半分ぐらいのところまで水流に負けて滝つぼに戻されてしまう。次から次へと挑戦してくるが、飛び越えるサクラマスはいない。見物人から「それっ、もう少しだ！ おいしい。頑張れ！」と応援が入る。滝つぼに水中カメラを入れていたカメラマンのモニター画面を見ていたが、おびたしい数のサクラマスが滝つぼにひしめいていた。私も望遠にセットして、三脚無しなので手振れしないように息を殺し、いつ飛び上がるのかわからない魚を待って撮影するのはかなり疲れる。いつの間に来たのか隣に制服のままの女子高生 2 人が、イオスの EF・L シリーズの高級望遠レンズを装着して撮影している。話の内容からすると写真部の部員のような。それにしても 1 本 30 万円もする望遠レンズを無造作に扱って撮影しているのは羨ましい。なんと、下流から 2 人の釣り人が崖を上がってきたのが見えた。撮影に夢中になっている間に釣り人はいなくなったので、腕に腕章をした監視員らしい人に「この川は釣ってもいいんですか。」と聞いたら「北海道の河川には禁漁はないが、サクラマスだけは釣ったら違法になる」と言い、釣り人は岩魚とアメマスを少し釣っていたと言っていた。

せっかくここまで来たのだから神ノ子池に行くことにした。以前と変わらず砂利道を少し走ることになったがこれくらいの砂利道は苦にならない。神ノ子池は摩周湖の伏流水で神秘的な青色をしていた。底のほうではオシロコマが泳いでいる。若いカップルがシャッターを押してと頼んできたが、一見感じの良いカップルだったので「ここよりこっちのほうがバックの池がきれいに写るよ」とおせっかいをしたら、なるほどと喜んでくれた。

帰りは最短距離のコースを急いだ。夕暮れが迫っている瀧沸湖の湖岸のエゾスカシユリの群生と放牧馬の群れにバイクを止め、カメラを取りだした。たまたま止めたところに相模ナンバーのバンが止まっており、大型の撮影機材を下ろしている最中だった。「スカシユリがいいですね」と話しかけると、「人が近づけない所は正直だね」と穏やかに話しながらカメラのセッティングに集中していた。

「さろまにあん」の 7 時の夕食には間に合わなくなったので遅れること電話をし、あせらずに暗くなりかけたオホーツク国道を急いだ。遅れたついでに先にふろに入り、夕食の座に着いたが、10 人近くの客で食卓は一杯だった。この夜は、結構走ったせいもあり、睡魔に襲われて夜のミーティングにも出ないで寝てしまった。



「さろまにあん」の夕食



清里の畑作地帯



神ノ子池





濤沸湖のエゾスカシユリ群生と斜里岳遠景





濤沸湖畔の放牧馬と斜里岳



7月17日(日)

さろまにあん—R238—卯原内—D591—D248—美幌—D243—屈斜路湖
—R243 弟子屈

鱒や

116km



「さろまにあん」出発の儀式

今朝も雨がアスファルトの上で跳ねている。それでも皆さんは雨の中を出発して行って、一人だけ残った。今日もここに泊まるのも選択肢の一つと思っていたが10時半頃天気が回復してきたので出発した。今日の目的地は釣りに詳しいとオーナーに紹介してもらった弟子屈にある「鱒や」だが、ここからはあまり遠くないので、いつものお別れの儀式をして、余裕で走り出した。ところが網走湖を過ぎたあたりからいきなり土砂降りになった。雨脚があまりにも強く、視界不良で危険なので、美幌バイパスの高架橋の下で雨宿りし、ヘルメットのシールドをきれいにした。バイクを止めていた所も雨水が流れ込み、水が溜まり始めたので急いでまた雨の中に走り出した。

美幌の街の蕎麦屋でお昼をとり、美幌峠を目指したが、標高が高くなるにつれ今度は雨に加えて濃霧となり、最悪の条件で美幌峠に着いたが、あの息をのむ絶景はどこへやら、レストハウスにも入らずに峠を下りだした。雨中走行にもすっかり慣れ、先行する3台のバイク集団を追い越し、ギアチェンジのたびにVツインの咆哮に酔いしれながら快調に下った。先ほどから気になっていたのだが、ブルーのヘッドランプのバイクが少し間隔をおいてついてくる。抜いて行く気はないようだが後にピッタリ付かれるのは気持ちいいものではない。雨中走行にも不安を感じなくなっていたので、スロットルを絞り込み、Vツインの鼓動を一気に爆発させた。80kmを超えるとシールドの水滴はきれいに左右に流れ去り視界がクリアになった。何回目かのコーナリングでミラーの視界からブルーのヘッドランプは消えた。不意に「鱒や」の小さい茶色い看板が目飛び込んできたので、通り過ぎるギリギリのところまで左折したが、濡れた路面でスリップ転倒を避けるブレーキングがかろうじてできた。しかし、予想外の砂利道となり、こんなところに宿はあるのだろうかと不安になりながら進むと、林の中に巨大なログハウス風の建物が見えた。



「鱒や」

しかし、看板も何もなくここが「鱒や」だとはすぐにわからなかった。到着してすぐ後からクラシックバイクが着いた。ひょっとして振り切ったバイクかと思ったが、ブルーのヘッドランプではなく、反対方向から来たみたいだ。1969年製ヤマハ350R3Cの名古屋ナンバーだ。敦賀からフェリーに乗り小樽に上陸して走ってきたというが、このバイクで良く走ってきたものだ。旧車で北海道に来るのだからさぞかしメカニックに強いのかと聞いたところ、「動かなくなったらバンのレンタカーで帰る覚悟で来た」とあっさりと言っている。夕食までは時間があつたのでロードスターの栃木のひととドカティの明石の若者と3人で裏を流れている釧路川で釣りをしたが釣れるのはウグイばかり。川に立ち込んで釣ればよさそうなポイントもあったがそこまでして釣る気はなかった。ここの浴室は、大きい1枚ガラスの額縁のような窓越しに、釧路川沿いの林が疲れた目を癒してくれる。吹き抜けの広いリビングでの夕食はおいしかった。まさかここで「時知らず」の鮭を食べることができると思わなかった。食後の飲み会は全員で思い思いの酒を飲み、オーナーの釣りの話も含め、ロードスターの50後

半の江戸っ子風の人、ドカティの30前半のJRの運転手、ヤマハ350の60近い職人の人達と気持ち良い酒を飲む
ことができた。



「鱒や」の夕食



「鱒や」のオーナー橘さん(右後)と宿泊客
ロードスターの人(左)
ヤマハR3Cの人(右から3人目)
ドカティの若者(右)
FLSTCの土門(前)



ヤマハ360R3Cとドカティ



7月18日(月)

鱒や—R243—D717—トウベツ川—D717—R391—標茶—R274—R240—阿寒
—R241—足寄IC—道東自動車道—芽室IC—L54—清水

こもれび

368km



釧路川支流 トウベツ川

「鱒や」のオーナーに教えてもらった第一のポイントのトウベツ川はすぐ見つかった。桜橋を渡って100mの所から右折し、そのまま直進すると堤防に突き当たり、バイクを駐車し、堤防を越えて川への下り口をさがした。ほどなく明瞭な踏み跡が見つかったが、多くの釣り人が訪れている証拠だ。ポイントは木の枝が川面を覆い、深くえぐれており、いかにも大物が潜んでいそうだ。手前のポイントから流すとすぐに当たりがありニジマスが釣れたが、大物には程遠い。流心を通してもアメマスとニジマスの放流サイズばかり。最後に、

覆いかぶさっている枝に仕掛けを引っ掛けずに上流へ投餌し、流れに乗せてポイントの核心部を流すと、目印にかすかなアタリがあったので期待を込めて合わせたが、空しく空振り。大物がいると確信し、もう一度流すと同様のアタリがあり、少し間をおいて合わせると重厚な手ごたえと同時に強烈な引きが7.2mの本流竿を満月に絞り込んだ。口を水面に出そうとしても潜水艦のように深く潜ろうとするこの引きはアメマスだ。しばらくして水面に現れたアメマスは、41cmの美しい魚体だった。これだけ暴れまわったのもう出ないと思いつつも同じポイントを通ると、今度は穂先まで感じる明確なアタリがあり、虚を突かれた形で合わせると、一気に走り始め、2度ジャンプを繰り返した。ニジマスだ。これもかなり大きい。しばらくやりとりをした後、手にしたのは幅広の36cmのニジマスだった。この2匹はゲットした。

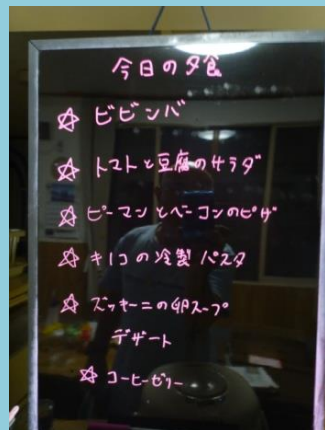
二つ目のポイントは気付かず通り過ぎ第3のポイントの南弟子屈橋に着いてしまったが水量が多すぎて川一面流れており、ポイントを特定できず釣りにならない。第2のポイントは、一度目は



アメマス(41cm)とニジマス(36cm)

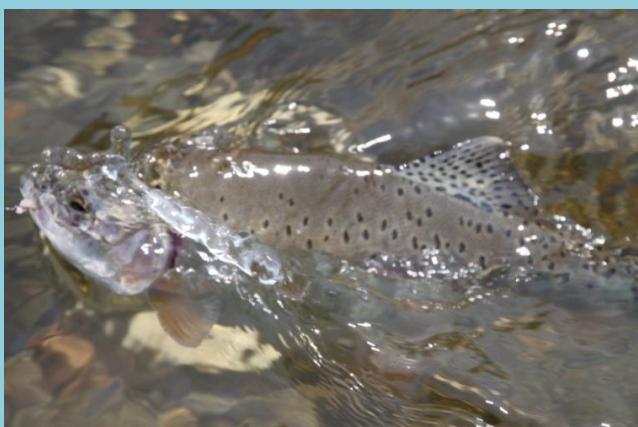
気付かずに通り過ぎて2度目で確認し、牧草地の端を少し歩き川に出たが、川面一杯に水が溢れて流れている。蛇籠の周囲は絶好のポイントの連続だが、釣り人の踏み跡で立派な道ができています。本流に立ち込んでの釣りは

気持ちが良いが、水量が多いため流すポイントを見極めるのが難しい。目的は大物狙いだから、流速のあるところを流したが、釣れてくるのはヤマメとアメマスの放流サイズとウグイ。しかし、トウベツ川の子ヤマメといい、北海道で久しぶりに見るヤマメは気品があり美しい。12時になるこの時間帯では大物は出そうにないし、今日の宿までは遠いので、釣りは止めて、阿寒横断道がR274のどちら経由にしようか迷ったが、あまり通る機会のないR274を選んだ。この道路は、交通量は少ないが波打つ原野を幾つも超えるアップダウンが多く、そして、不意に直角に曲がった

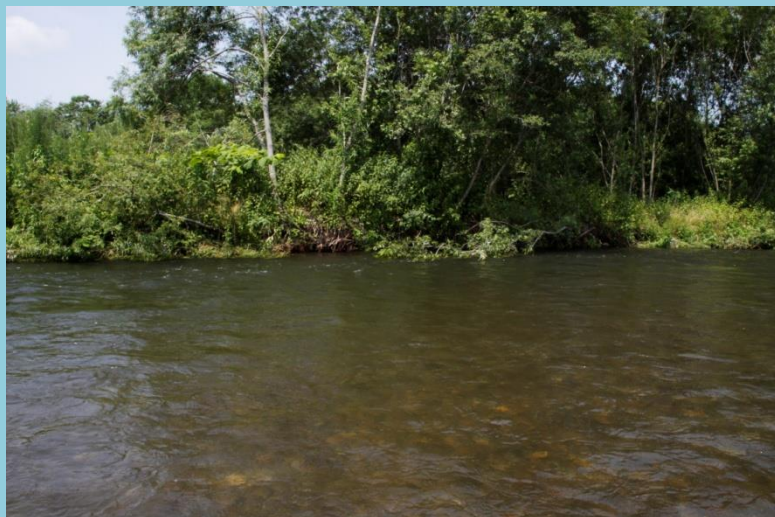


たりする道路でわかりにくい。浦幌から道東道に乗ろうと思っていたが国道未開通部分があり、阿寒湖を経由して足寄ICから乗ることにした。だいぶ遠回りしてしまった。芽室ICを下りてから今日の宿「こもれび」はわかりにくい、今までの経験と動物的勘を最大限に働かせて、草原の中の林の中に隠れているような「こもれび」を見つけたのは6時を過ぎていた。この宿は独身の若いオーナーが一人で全てやっている。したがって夕食はセルフが基本で大きな器から自分で好きなものを好きなだけ取って食べるのであるが、3人の客にたいしての食事量が見当はずれも甚だしい。残ったのを心配したら「冷凍にしておいて、まかないで食べる」と言っていたから、粗末にはしていないのだと安心した。客はランクル70 ZX の千葉の人と徒歩の東京の人で、東京の人は毎年ハスカップの時期に飛行機で来て、ここにだけ4泊ほどし、近くの農場でハスカップ採りをして帰るそうだ。千葉の人は私が持

参したサルナシ酒がすごく気に入って飲み、おかげで2Lほど持参したのにフツェリーで飲む分もなくなってしまった。このオーナーは帯広の木工訓練所出身で、宿の内装、家具類、離れの部屋全てを自作している。東京からの人が言っていたが、来るたびに部屋の様子が変わっているそうだ。



十勝川支流音更川



7月19日(火)

こもれび—R274—D771—L54—D771—音更川—R241—帯広—R38—十勝清水
—R274—日勝峠—日高—R237—L131—L74—L59—L74—鶴川四季の館
—鶴川IC—日高自動車道—苫東中央IC—R234—D259—苫小牧フェリーターミナル 167km

「鱒や」のオーナーに教えられた音更川に9時ころ着いたが、先客2人がすでに釣っていたので、そこから離れたところで、川がカーブしているような霧囲気の見当をつけ、牧草地を歩くのには抵抗を感じたが、川に近付くところも釣りロードができています。昨日、道東自動車道から見た利別川は濁流だったが、音更川は澄んでいた。しかし、河原に下りてみると、河原の草の上を水が流れているところから、普段より水位が50cm多い。ここで釣れるのもニジマスが大半で、アメマスがたまに釣れるが、本州では良型でも北海道では放流サイズばかり。この時間帯のこの炎天下では大物は出そうもないと感じ、11時に竿を収めた。

日勝峠はトラックとの戦いだった。道東道が有料になったためか、トラックが大半を占めている。登坂車線に差し掛かるとシフトダウンをするやいなやスロットルをほぼ全開にし、Vツインのトルクフルなエンジンの本領発揮でタイミング良くトラックを追い越し、一気に峠を越えた。いつも休む日高の道の駅で冷えたメロンを食べようとしたが、以前のようにカットメロンは扱っていなかった。ここが北海道とは思えないほど暑い。アイスを食べて体を冷やした。鶴川沿いの道路は相変わらずのんびりした霧囲気で思わず睡魔が襲ってくるが、平取に近付いてきたら急に気温が



下がり始めた。このあたりまで海風が入ってくるようだ。苫小牧に予定通り4時半に到着し、今年の北海道の旅は無事終わった。心配した台風による欠航は仙台から名古屋までで、苫小牧から仙台は大丈夫だった。大洗行きは昨日より21日まで欠航が決定。今晚は揺れを覚悟しなければならない。

レストランでは恒例の赤ワインを開けた。しかし、いつもの達成感、充実感はいまいちだ。リターンライダーとして北海道ツーリングを始めて11年目だが、今年のような悪天候続きは初めてだ。この時期の北海道の天気は最も安定しているはずで、年によっては雨具を全く着なかった時もあったぐらいだ。北海道の人達も最近は異常気象だと言っているが、そのうち、異常ではなく当たり前になるに違いない。確実に温暖化は進み、もはや、北海道の天候は東北のそれと同じで、滞在中は明らかに梅雨の現象で蒸し暑い日が続いた。ブランド米の「雨竜米」のように北海道の米がおいしくなっているし、今後の気候の推移を見込んで、山形県東根のさくらんぼ農家は富良野でさくらんぼを大規模に栽培し始めている。初めて北海道に自転車で渡った大学3年の時以来、45年の間に自然環境とともに文化も大きく変貌を遂げてきたことを、無責任な一旅人として客観的に目の当たりにしてきた。

今回、一番心残りだったのは、4か月のトレーニング期間と、軽量テント、シュラフなどの新たな装備を揃え、周到な準備をしてきた大雪山の3泊4日の縦走ができなかったことだ。しかし、今回の天気ではどうしようもなかった。強行していれば遭難の可能性もあった。単独行の場合は、全て自分の力で行動しなければならないので慎重にならざるを得ないが、完璧に条件が揃った時だけ登ろうとするのも、登山という観点からは狭い世界しか見られないのではないかと思った。あらゆる天候のもとで行動することにより、より深く自然を体感することができるのであろうが、そのへんの兼ね合いの判断がむずかしい。来年は完璧な条件の時だけにこだわらず、少々リスクは負いながらも、大自然の大きさとその中での自分の力をみためるためにリベンジするでしょう。

7月20日(水)

～～仙台港フェリーターミナル仙台産業道路―仙台バイパス名取川堤防―自宅

30km

揺れることは揺れたが、思ったほどではなかった。携帯のエリアが以前と比べるとかなり広くなって、航行中全くの圏外は津軽海峡沖の一部分だけとなった。仙台に上陸した時は雨が降っていなかった。仙台東部自動車道の入口の仙台東ICの遥か前から渋滞していたので、仙台バイパス経由に変更した。順調に雨にも打たれず帰れると思ったら、自宅まで6kmのところまで雨が降り始め、1km手前で強くなり、最後の最後まで雨にたたられた旅にふさわしいフィナーレとなった。

道内走行距離 2593km

総走行距離 2648km

